異界の魔術士 4

Main Characters
登場人物紹介
ブラット
『銀月の牙』という傭兵団を率いる傭兵団長。冷静沈着で寡黙な男。
ガリウス
名のある門閥貴族の次男だが、王都から地方へと飛ばされた曰く付きの不良騎士。
バルティア
昨今傀儡より脱却したグラントゥルモス帝国皇帝。朔耶をこよなく愛する24歳。
アンバッス
フレグンス辺境騎士団の中隊長。無骨な古強者の騎士で、情に厚い。
ブラハミルト
『知の都』と呼ばれる大国ティルファの最高指導者。魔術士でもある。
レティレスティア
『精霊の国』と名高いフレグンス王国の王女。優れた精霊術士。16歳。
拓朗
朔耶の幼馴染で、元ミリタリーオタク。
孝文
朔耶の弟。機械好きの理屈屋。
重雄
朔耶の兄。萌えオタで妹好き。
都築朔耶
異世界で「発明家魔術士」となった女子高生。機械弄りと武道と人をのせる演技が得意な18歳。

序章

「ただいまー」
「おかえりー、お風呂沸いてるわよー」
庭先に帰還した朔耶を、母のノンビリした声が迎える。
近所の神社にいた精霊と契約を交わして以来、度々こうして異世界と地球を行き来するようになった朔耶。母もすっかり娘の異世界往来には慣れたらしい。
朔耶は居間に上がり、弟孝文とアイディアノートを弄りつつ兄重雄が帰宅するのを待つ。そして三人揃ったところで知の都と呼ばれる大国、ティルファでの顛末を語った。
「という訳で、船外機のお披露目は大成功でした！」
「おお～」
「やったなっ」
朔耶達の設計で作られた推進器、すなわち船外機をつけた機械船で、ティルファの水軍高速艇に勝ったという話。
先日、朔耶達は異世界の街、カースティアの観光事業の一環として特殊な釣り船観光を考案し、

船三艘の手配を進めていた。
　最初は機械船そのものの安全性を疑問視するティルファの船大工ドマックに、造船を拒否される。それでも食い下がる朔耶に、ドマックは『水軍の操る高速艇と競争して勝ったら造ってやる』という無茶な対戦を提案してきたのだ。結果は朔耶の圧勝だった。
　オレンジジュースとコーヒーとビールで乾杯して喜び合う兄姉弟達。
「結果的に機械船の知名度は急上昇、観光事業でかなりの客寄せになるな」
「うん、タカ君のモーター、これからも期待してるからね」
　さしあたって残り二艘分の船外機に使う魔力石モーターを作り、それから他にも色々な用途に使えるようにモーターの小型化についても試みる予定だ。とはいえ朔耶が見た限り、ティルファの研究者達も意外と早くモーターの類を自力で作り出しそうな勢いだった。
「多分、魔術式で似たようなのを作っちゃうんじゃないかなぁ」
「さすがに魔力石の細かい加工はまだ無理か」
「サクヤ式モーターの心臓部は魔力石使用の反発力ユニットだから、これが作れない限り朔姉の優位性は揺るがないな」
　朔耶のような精霊と重なる者ならともかく、普通の人間には地球にある高性能の工作機械でも使わなければ魔力石の細かい加工は難しい。そのためティルファの研究者が自前の反発力ユニットを製造するには相当な時間が掛かる、と孝文は予測した。なので今の内に反発力ユニットを単品で売りに出す事も検討する。

「機械船みたいな乗り物に使えるレベルのモノは、しばらくは朔姉の工房でしか作れないって事で」
　そのうち天才が現れるなり加工技術が進むなりして、向こうでもそこそこの物が作られるようになるだろうという結論に至った。
　ひとしきりティルファの技術力談義をした後、朔耶は観光事業が軌道に乗った後の計画、『屋形船作戦』について切り出した。
　戦後処理などで最近ずっと忙しくしている近衛騎士団長イーリスと、彼に構ってもらえず寂しそうにしているレティレスティア。そんな二人の間を何とか取り持ってやりたいと考えた朔耶の作戦だ。
「お姫様と護衛の騎士か～王道だな。そういう場合は切っ掛けさえあればダーーッと行きそうなんだけどな。例えば……
『イーリス？　何故ここに……』
『レスティア様が、逢引をしているという噂を耳にしまして……』
『まあ！　酷いっ、私の事をそんな風に見ていましたのね！』
『いえ、私はレスティア様を信じております。ですが、逢引は事実のようです』
『どういう、意味ですの？』
『……それは、こういう事です！』
『ああっ、イーリス……いけません、こんなところで』
　ってな感じで――ん？　どうした朔耶」

何やら覚えのあるシミュレーションにがっつり落ち込む朔耶を見て、首を傾げる兄殿。
「まあ、重兄の妄想シミュレートはともかく、忙しくて時間が取れないってのは仕事を任せられる部下がいないせいだと思うぞ？」
騎士団長としてまだ若いイーリスは、回ってくる仕事をほぼ自分一人でこなしているのだろう、仕事を任せられるぐらい優秀で信頼できる部下を養成するところから始めるべきだと話す孝文。
「なるほどー、さすがタカ君」
復活した朔耶は、ついでにカースティアの騎士達との関係について、何か良いアイディアが無いか訊ねてみた。カースティアの派遣騎士団の騎士達は、朔耶が本部の食堂に入れば途端に静まり返るし、廊下ですれ違う時など反対側の壁にぴったり寄ってこちらの様子を窺ったりするのだ。露骨なまでの警戒ぶりだった。
「ふつーに接してたらいいんじゃないかな」
「え～～、だって怖がって近付いて来ないんだよ～～？」
「だからって無理に近付けば逆効果だよ。自然に振る舞ってればそのうち向こうが慣れるって」
「そうなのかなぁ」
確かに朔耶は、カースティアに詰めている騎士達とはまだほんの数日、それもわずかな時間しか顔を合わせていない。とりあえず今度行く時は弟の言に従ってみる事にした。

「朔耶」

翌日、友人達と平穏で楽しい学校生活を過ごした帰り道、自宅近くで男の子に声をかけられて振り返る。
「あ、拓ちゃん」
幼馴染の男の子、鳥越拓朗。昔はよく兄と弟と一緒に、朔耶とつるんで遊んでいた。小さい頃から家族ぐるみの付き合いがあるので、ほとんど兄弟と変わらない存在だ。
改造好きの行動派であり格闘オタクな兄と、その発想力で兄の改造方針を支えた理屈屋の弟。そしてそれらの元ネタとなる様々な防犯グッズを提供してきたミリタリーオタクの拓朗。朔耶に多大な影響を与えた三人の内の一人である。ある意味、朔耶の必殺技『稲妻ビンタ』は、この三人とつるんだ経験の集大成とも言える。
最近は少し疎遠になっているが、会えば昔と同じく自然に会話が出来る、そんな関係である。
「どうしたの？」
「……お前、俺に何か言う事があるんじゃないのか？」
真剣な表情でじっと目を覗き込んで来る拓朗に、「んん？」と小首を傾げて惚ける朔耶。
「ちょっと来い」
「え、あ、ちょっとっ」
むんずと朔耶の腕を掴んだ拓朗は、そのままグイグイ自分の家へと引っ張り込む。玄関に入ったところで、居間にいた拓朗の母親みよさんが声をかけてきた。
「あらー朔耶ちゃんー久し振りねーー！」

「みよさん、ご無沙汰してますーって、ちょっと拓ちゃん待ってよ」
挨拶する母親を煩わしそうに見ながら朔耶を二階の自室へと引っ張っていく拓朗。この家の階段は急なので、腕を取られたままではバランスが取り辛い。朔耶は拓朗に抗議した。兄直伝のやり方で。
「やだ、痛いよ拓ちゃん……お願い、放して」
「ぶっ！　お、お前な！」
懇願するような媚びた声色を使いつつ朔耶がしゃがみ込む。すると、「んまー！」と声を上げたみよさんが、パタパタとスリッパを鳴らしながら駆けて来る。
「んまーダメよ拓朗ちゃんー朔耶ちゃんには優しくしなきゃあ！」
拓朗は「うわちゃーっ」と天を仰いだ。
「みよさぁーん、拓ちゃんったら無理矢理あたしを部屋に連れ込もうとするんですぅー」
「んまーダメよねーイケナイわよねー無理矢理なのはよくないわぁー、でも男の子ならちょっと強引なくらいがいいわよねー？」
「あーもうっ悪かったから！　俺が悪かったから母さんはすっこんでてくれ！」
「んまっ酷いわ拓朗ちゃん……」
おおむねこんな家族であった。

夕日の射し込む窓を背にしてベッドに腰掛けた朔耶は、「なんか前よりスッキリしたねー」と部屋を見渡し、それから、

「で？　あたしに聞きたいことって？」
と拓朗を促す。
「シゲ君とタカ君に聞いた」
「ありゃま」
拓朗は朔耶の異世界旅行について都築家の兄弟から聞かされたらしい。そして何故自分には一言も話さなかったのかと問い質してくる。
「ん～、だって軽々しく言いふらせる内容じゃないっしょ？」
「だからって、黙ってる事はないじゃないか。俺だって話を聞いてれば色々協力できたのに……」
最後の方はごにょごにょと聞き取りにくい小声になる。つまりは家族も同然の仲なのに内緒にされた事が気に入らないようだ。
「ごめんね、拓ちゃん……拓ちゃんに迷惑かけたくなかったの」
朔耶はベッドのシーツを指で弄びながら、俯き加減でそっと枕を胸に引き寄せる。
「迷惑だなんて……」
「っていうのは建前で、あんま知ってる人増やすと面倒だからってのが本音です」
「……お前は……」
胸に抱えた枕を頭に載せてそんな事をのたまう朔耶に、こういう奴だったと脱力する拓朗。
事情をかいつまんで話した朔耶は、拓朗に対し、家族には明かさないようにと念を押した。
荒唐無稽な話だとしても、朔耶が先日約二ヶ月にわたって失踪していた事は事実なのだ。話が広

まれば、色々と変な探りを入れてくる輩が出てこないとも限らない。枕で巨大リーゼントとかやりながら真剣に話す朔耶に、拓朗も理解を示す。

そして今後は彼にも、魔力石を使った道具の開発や、異世界への干渉についての相談メンバーに加わってもらうという事で話がまとまった。

「それにしても、拓ちゃんの部屋に来るのも久し振りだねー。随分大人しい雰囲気になったじゃない」

改めて〝幼馴染の男の子の部屋〟を見渡す。以前はモデルガンやらコンバットナイフやらが壁にたくさん飾ってあったが、今は上着とかカレンダーが吊ってある程度だ。

「まあな、俺もいつまでもミリオタやってる訳じゃないさ」

「ふぅ〜ん、拓ちゃんも成長してるんだ？」

そんな返しに苦笑しながら、拓朗は朔耶と玄関まで一緒に下りる。そして明日にでも都築宅に行くと言って朔耶を見送ったのだった。

帰宅した朔耶は、とりあえず兄と弟にデコピンスペシャルをお見舞いしておいた。

「俺等なんでデコピン喰らったんだ……？」

「うーむ……謎だ」

第一章　孤児院の娘

まだ薄暗く、肌寒い空気の漂う夜明け前。

「今から行くのか？」

「うん」

今日は幼馴染の拓朗が転移の瞬間に立ち会うため、都築宅を訪れていた。

「それじゃ、行ってきまーす」

「おうー、気をつけてな」

いつもの動きやすい格好で自宅の庭先に出た朔耶は、不思議な光に包まれたりとか、派手な魔法陣を浮かべたりするでもなく、ただ静かにオルドリア大陸へと転移した。目の前で音もなくスッと消えた朔耶に、拓朗は一瞬目を瞠る。

「ほんとに、特殊効果も何もなしにいきなり消えるんだな……」

「帰ってくる時もイキナリだからな、あの円の中には入るなよ？」

重雄の指し示した先には、朔耶の転移場所の目印として円が描かれていた。

「ここはどこかな〜？」

まだうっすらと星が見える朝焼けの空。陽光を受け金色に縁取られた雲が遠くに見える。立ち並ぶ街灯の先には、白亜のテラスと大きな階段。

『って、お城のそばじゃん！』

コンカイハ　トクニ　ケハイガ　ツヨカッタ

前回と同じく、フレグンスの精霊の気配を目指して転移したところ、最もそれが強く感じられた場所がここだったという。王族の〝血〟と盟約を結ぶフレグンスの精霊が、城に近い場所にいてもおかしくはないが、今まではどこか街中に出るのが常だったため朔耶は驚く。とはいえせっかく来たのだからと少しばかり立ち寄る事にした。

いつも空から直接城の敷地内に下りてくる朔耶が、今日は珍しく入り口から現れた事に、衛兵が目を丸くする。

『おっはよーレティ、起きてる？』

――サクヤ？　おはようございます、ちょうどお茶をいただいていたところです――

『そっか、これから祈りの儀式だっけ？』

――はい。最近はサクヤが重なっていた精霊も感じられるようになってきました――

なるほどそれで城の近くにいたらしい。フレグンスの精霊がレティレスティアと交感を繋ぐ日も近いかもしれない。

しばらく城内をぶらぶら歩いていた朔耶は、儀式のため地下神殿に向かうレティレスティアと合流する。朔耶が一緒という事で、いつもゾロゾロ付いて来る護衛の騎士やら神官達には外してもらった。普段なら粛々と進むだけの道程を、今日に限ってはお喋りしながら楽しく歩く。

途中、イーリスの話題になった。ああいう真面目で奥手な男にはこちらから積極的にならないと進展しない、だから迫っちゃえと嗾ける朔耶に、レティレスティアは「母様にも同じ事を言われました」と軽く溜め息を吐く。やがて地下へと下る二人。

「じ～～」

「もぅ、サクヤったらまた……そんなに見つめないで下さい」

儀式用の薄い衣に着替えたレティレスティアを、朔耶が『ええ身体しとるなぁ』とおっさん目線で見つめている。恥ずかしがるレティレスティアが抗議するも、その様子がいちいち可愛らしい。一度視られる事への羞恥を覚えてしまったためか、過剰に反応している。

「そういうとこイーリスに見せたら一発な気がするけどなぁ」

「そんなっ、こ、こんな格好で……無理です、恥ずかしいです」

「ふーむ、イーリスとレティにも、レイスとフレイの十分の一でいいから積極性があればなぁ……」

あの二人は人の目がなければあっちでイチャイチャ、こっちでイチャイチャ、イチャイチャ三昧だと評する朔耶に、レティレスティアも赤くなりながら小さく頷く。どうやら城内で二人のイチャイチャを目撃した事があるらしい。

そんな調子でからかい半分、可愛がり半分、楽しみながらレティレスティアを送った朔耶は、地下神殿の前で別れて地上に向かう。

今日もカースティア観光事業関連で色々と飛び回る予定であった。だが今のレティレスティアと

のやり取りで、先にやるべき事が出来たので、朔耶は王宮区画にある兵舎に向かう。
「おー、訓練中かぁ」
兵舎近くの訓練場にて、合同訓練中の近衛騎士団と聖騎士団を見つけたので、そちらに足を向ける。
近衛騎士団よりも豪華な甲冑を纏う聖騎士団は、精霊神殿に属する騎士団で、王国騎士団並に高位の存在である。近衛騎士団と同じく指揮系統が独立しており、神殿の意向が最も尊重されるので、王権も無理には介入できない特殊な立ち位置だ。
ちなみに、王女であるレティレスティアは個人的に聖騎士団を動かせるが、それは彼女がその精霊術の才によって神殿内である程度の地位を築いているからだ。同じ理由で王妃アルサレナも聖騎士団を動かす事ができるが、その夫であるカイゼル王は神殿内では大口の寄付者という立場でしかないため、思いのままにとはいかないらしい。
「あ、いたいた」
模擬戦形式の訓練に勤しむ集団の中に、訓練用の槍を豪快かつ繊細に振り回しているイーリスの姿を見つけた。
回転運動から突きに転じて相手の武器を絡め取る繊細な槍捌き。一方対戦相手の聖騎士団長も盾を駆使して必死にそれを捌いていた。しばらく攻防は続いたが、訓練終了を告げる鐘の音を合図に両者は動きを止めた。聖騎士団長が息をつきながらイーリスに声をかける。
「今日はいつものキレがありませんでしたね」
「いや、そちらの腕が上がっているという事でしょう」

同じく息を整えながらそんな言葉を返すイーリス。兜を脱いだ聖騎士団長は、頬に張り付いた金髪を脇に寄せ、額の汗を拭った。
フューリ・テレシア聖騎士団長。女性ながら聖騎士団の中で唯一、近衛騎士団長イーリスとまともに打ち合える騎士で、少し彫りの深い凛々しい顔立ちをしている。
「随分上達されたと実感しますよ。私もうかうかしていられません」
イーリス団長の言葉にフューリ団長は、澄んだ青い瞳に敬意と喜びを籠めて微笑んだ。そこへ、小さく手を振りながら朔耶がやって来る。
「イーリス〜」
大勢の騎士達が居並ぶ訓練場を、泥の塊を避けながらちょこまか歩く朔耶。近衛騎士達は朔耶と交流する機会も多かったので、「おー、サクヤ様だ」とか「相変わらず小さいな」などと囁いては和んでいた。一方、ほとんど面識の無い聖騎士団員達は、噂に聞く〝黒髪の戦女神〟の登場で緊張した空気に包まれた。
「サクヤ殿、どうなされました？」
「うん、ちょっとイーリスに話したい事があったの」
朔耶は、孝文が言っていた『仕事を任せられるぐらい優秀で信頼できる部下の養成』を勧めてみた。
「イーリスが忙しすぎるのは、何でもかんでも自分で背負い込んでるせいだと思うのよね」
「否定はしませんが……しかし、重要な仕事ですので」
「だからぁ、その重要な仕事を任せられる部下を養成する事から始めましょうって話よ」

「ですが、それは……」
複雑な表情で言いよどむイーリス。朔耶は彼の懸念を察して一言告げる。
「別にサボるために部下を使えって言ってる訳じゃないよ？」
するとイーリスは一瞬、ハッとした表情を見せた。なるほどこれは真面目の塊だと、朔耶は弟の読みの冴えに感心した。そうして決め手の口説き文句を放つ。
「もうちょっと、部下の事を信頼してあげたら？」
「っ！」
愕然として立ち尽くすイーリス。実際には信頼していない、などという事は無いのだが、その真面目さと責任感の強さゆえに『私は部下を信頼していなかったのか！』と衝撃を受けたらしい。
「そうですね……将来の事を考えれば、そういう上に立つ者としての能力を鍛えてやる事も必要でした」
助言を真摯に受け止めるイーリス。だがその様子を見ていると、今度は部下の養成にかまけてレティレスティアと会う時間を取らなくなりそうで心配になってくる。なので、レティレスティアの話題も少し振っておく事にした。
「レティって結構胸おっきいよね、肌も白くて綺麗だし」
「ぶふっ！　い、いきなり何を……！」
上に立つ者としての在り方を示唆する言葉に深く感銘を受けていたところへ、唐突な話題転換。しかも王族を対象に性的な意味合いを含む、あり得ない話題にイーリスは声を詰まらせた。

「ゴホンッ。サクヤ殿には、もう少し慎みを持っていただきたい」
「ふ～～ん」
ぐぐっと目を覗き込んでくる朔耶に、イーリスはたじろぐ。
この黒真珠にも似た瞳に見つめられると、胸の内を見透かされているようで落ち着かない。今の話題転換で思わず想像してしまった事にも気づかれた気がして、ついつい目を逸らしてしまう。そんな葛藤中のイーリスからひょいと視線をずらした朔耶は、後ろに立つ女性騎士に声をかけた。
「イーリスと打ち合えるなんて、凄いね」
「え……い、いえ！　勿体無いお言葉です」
まさか声をかけてもらえるとは思っていなかったフューリは、慌てて背筋を伸ばして礼を執る。精霊の力をまるで精霊そのものであるかのごとく振るう朔耶は、精霊神殿にとって崇め讃えるべき存在であり、精霊術を駆使して戦う聖騎士達からすれば、まさに憧れの対象であった。
「さて……それじゃあ、あたしもう行くね」
二歩、三歩と下がってイーリス達から距離を取ると、朔耶は魔力のオーラを纏って漆黒の翼を噴出する。どよめく訓練場に光が溢れた。同時に訓練で酷使された騎士達の身体が癒されていく。
「以上、特別査察官からの特別サービスでした～」
そんな台詞を残して王都の空へと舞い上がった朔耶は、カースティアを目指して飛んでいく。
近衛騎士達は相変わらず気さくで面白い方だなぁと談笑し、聖騎士達は噂に聞く癒しの光を受けられた事と、その大きな治癒の力に感動していた。

「ポンプ、ちゃんと届いてるかなぁ」
三時間半ほどでカースティアに到着した朔耶は、騎士団本部の屋上に降り立つと、一階の受付を目指して建物内をてくてく歩く。先日、フレグンスの馴染みの工房で作ってもらった手押し式ポンプと革のホースを、こっちに運んでもらえるよう配送業者に依頼しておいたのだ。
途中すれ違う職員や騎士達が、不意に現れた朔耶に対し表情を凍らせて壁際に避けるなど、相も変わらずな畏怖っぷりを見せたが――
『なんか慣れたね～』
サクヤガ　サキニ　ナレテシマッタカ
騎士達が朔耶に慣れる前に、朔耶の方が騎士達の反応に慣れてしまった。
「ようサクヤ、相変わらず急に現れてんな」
「ガリウス、まだ受付に座ってんの？」
「あー、ここの担当が復帰するから俺は今日までだぜ」
臨時受付担当のガリウスが答える。先日起こったフレグンスの衛星国家サムズによるカースティア侵攻。それに先駆けた和平会談襲撃事件によって、派遣騎士団は壊滅状態に陥り人手不足が続いていたが、それも徐々に解消しつつあるらしい。
「そういや王都から荷物が届いてたぞ。なんだありゃ？」
そう言って、ガリウスはフロアの隅に積んである荷物を指した。朔耶は「よしよし」と荷物の中

身を確認すると、早速食堂脇にある井戸にポンプを設置しようとする。
（ガリウスはどうせ面倒くさがって手伝わないだろうし、そもそも受付係は席外せないよね）
半分木製とはいえ、手押しポンプは結構な重さがある。一人で作業をするには少々辛いので誰か暇そうにしている者はいないかと周囲を見渡し、適当に目を付けた騎士に声をかけた。
「そこの人、ちょっと手伝って」
「じ、自分が、で……ありますか？」
おっかなびっくり朔耶の助手を務めた騎士は、最初こそやたらと緊張していたが、朔耶の気さくさに触れ、作業が終わる頃にはすっかり打ち解けていた。
「いいですね、これ」
「便利でしょ？　他の人達にも使い方を教えてあげてね」
一仕事を終えて一階のロビーに戻った朔耶達。出て行く時は緊張で顔色を失っていた騎士が、朔耶と談笑しながら戻って来た事で、他の職員や騎士達は一様に目を丸くしていた。
「終わったか？　フランとスラントから観光事業の下準備の報告が上がってるが、……聞くか？」
「当然っ！　で、どんな感じ？」
ガリウスは、朔耶が作業している間に纏めた観光事業関連の書類を手に、必要な人員の手配や施設建設準備の進行具合などを報告した。
「ふんふん……施設とかの建設は上手くいってるみたいだけど、人員の確保が滞っているわけね」
「まあ、儲かるかどうか分からねぇ内からほいほい協力してくれる奴はそういねぇからな」

「そうだね、その辺りはあたしが直接回って話をつけてみるよ」
「ほう、特別査察官殿自ら足を運ぶってか。今更だがお前、本当に変わってんなぁ」
からかうようにそんな事を言うガリウスに、朔耶はふと、彼に対するある人物の評価を思い出した。
「アンタもしっかり協力してよね、ルティも期待してたよ？」
「ルティ……？　って、まさか……」
書類をひらひらさせていた手を止めて、怪訝な表情になるガリウス。
「ルティレイフィア第二王女様」
「げっ、姫さん帰国してんのか！」
あからさまに嫌そうな顔をするガリウスに、今度は朔耶が怪訝な表情になった。
ガリウス曰く、顔を見れば必ず手合わせを挑まれるらしい。しかも剣術がなかなかに達者で、魔術と精霊術も絡めてくる上に実戦慣れしているから本気で手強い。
「絶対囮に使った事を根に持たれてるぜ……」
数年前、王都に巣食っていた犯罪組織を壊滅に追いやった第二王女誘拐事件。一部の大物貴族達が組織の活動を黙認し、周りに圧力をかけていた事もあり、当時はカイゼル王やアルサレナ王妃の耳にも情報が届かなかったらしい。その誰もが手を出せなかった組織を潰すため、ガリウスは度々お忍びで街に出ていたルティレイフィアを利用したのだ。
どうにも苦手なんだよなぁと、ガリウスは眉をひそめながら頭を掻く。
「なんというツンデレ」

「なんだそりゃ？」
「こっちの話よ」
朔耶はガリウスがルティレイフィアを苦手としている事にも驚いたが、それよりもルティレイフィアの写真を渡して特徴を伝えただけで彼女のツンデレ属性を見抜いた実兄に驚いた。
朔耶のルティレイフィアのイメージでは、ガリウスの前に出れば普段の勇ましさや凛々しさが影を潜め、〝もじもじ乙女モード〟になると思われたからだ。そんな風に別の意味でガンガン攻めていたとは思いも寄らなかった。
「屋形船作戦にも第二案が必要かもね……」

昼からは、釣り船観光事業に参加、もしくは前向きに検討してくれている宿屋に挨拶をして回る。彼らには釣り船と連動し、客の釣った魚を料理して出してもらうつもりでいる。
しかし他の客達との食事の作り分けや、釣り船上で怪我人が出た場合など不測の事態に対応できる体制作りには、手間やコストも掛かる。さらに経営に余裕があり、貴族も利用できるそれなりに立派な宿、という条件もなかなかに厳しいため、今になって尻込みするところもあった。それでも、協力してくれる宿にはサクヤ式コンロを提供する旨を伝えると、交渉もかなり進むようになる。
「お噂はかねがね聞き及んでおりました。実際に某貴族邸にて拝見した事もありますが、あれは良いものです」
宿屋を回り終えると、次は湖周辺に向かい、今回協力してくれる漁師達の家を回る。夜の操業も

可能か、何日連続で仕事が出来るかなど色々と話を聞き、給金の交渉なども行う。漁師達曰く、
「雨だろうが夜だろうが船は出せるけんどもよ、漁より儲からにゃあやってられんけんね」
との事だった。契約は家族単位で結ばれ、船長、料理人、補佐といった乗務員の構成は家族内で行う。そうして漁師達にも協力を取り付けていった。

「ふう～、これで宿と人員は大体確保できたかなー」
夕方頃、交渉を終えて街に戻って来た朔耶が本部に入ると、受付前で何やら悶着が起きていた。受付にガリウスの姿は無く、代わりに見知らぬ職員が詰めている。どうやら復帰した受付担当らしい。
「お願いします、もう明日の食べ物もないんです」
「ですから、こっちも資金に余裕がないんですよ」
担当職員は、援助を訴えてカウンターに縋りつく女性を困った様子で諭している。見れば女性は二十歳過ぎか、灰色にも似たくすんだ銀髪に薄い翠眼をして、継ぎはぎだらけのローブを纏っていた。
「ねえ、どうしたの？」
朔耶は声をかけてみる。振り返った担当職員は朔耶を見て一瞬顔を引き攣らせたが、なんとか気を取り直しこの騒動について説明する。
「じ、実はこちらの方が、騎士団に資金援助を訴えているのですが――」
現状、この派遣騎士団本部に経済的な余裕は無く、むしろ不足している。そのため援助は不可能だと諭しているのだが、なかなか引き下がってくれないのだという。

「ふむふむ、貴女のお名前は？」
「は、はい？　えと……」
「あたしは朔耶。一応ここの関係者だから、あたしが話を聞くよ」
「はぁ……あの、わたしはこの街で孤児院を預かっているアマレストと言います」
聞けば、彼女自身その孤児院の出身者であり、見よう見まねで覚えた拙い魔術を使って院長を手伝い、孤児院の子供達と共に石売りなどをして生計を立てていた。だが、高齢だった院長が亡くなってからは孤児院の経営も上手くいかず、院長が残してくれた蓄えも減る一方。
そして先日、和平会談襲撃事件が起きた日の夜。押し入って来た武装集団によって院内は荒らされ、最後の蓄えが略奪されてしまった。それからは経営が完全に立ち行かなくなり、明日食べるものにも事欠く有り様だという。
「あの襲撃事件の後、両親を失った孤児達が大勢うちへ預けられました。でも……」
孤児院への援助はほとんど無く、このままでは子供達を飢え死にさせてしまうと必死に窮状を訴えるアマレスト。
「ふーむ、その孤児院の規模と状態は？」
朔耶が職員に訊ねる。以前、ガリウスが意見書の束を整理していた時に、孤児院への資金援助を乞うモノをちらっと見たような記憶がある。職員は書類を片っ端から引っくり返しながら「記録の担当が～」とか「要望申請書の控えが～」などと唸り始める。どうやら把握できていないらしい。
「じゃあ直接見に行きましょうか。アマレストさん、案内してくれる？」

「あ……、はい」
がっくりと落ち込んだ様子でとぼとぼ歩き出すアマレスト。
彼女は心中、失意と悲嘆に暮れていた。何とか子供達を助けてもらおうと、怖いのを我慢して騎士団本部に来たものの、結局援助は引き出せなかった。今日も子供達に食事をさせてやれそうにない。
（みんな、ごめんね……）
職員の対応から見て、この異国風の少女はフレグンス貴族の令嬢か、あるいは騎士団本部の偉い人の縁者なのだろう。彼女が孤児院の現状を見てどこまで口添えしてくれるかは分からないが、少しでも情けをかけてもらえるよう精霊に祈る。そして『いよいよとなれば、もうこの身を売るしかない』と、アマレストは悲壮な覚悟を懐いていた。

日暮れの街では、建物の窓明かりや、商店の入り口にあるランタンが通りを照らし始めている。繁華街は人通りも多く賑やかだ。アマレスト達の孤児院は、その表通りから外れた静かな区画にある。
「ここです……」
「え、ここっ？」
アマレストが立ち止まり、見上げる視線で示した古い建物。
そこそこ大きな屋敷ではある。だが入り口の扉は壊れ、中は真っ暗。しんと静まり返り、壁に開いた大きな穴が継ぎはぎの布で塞がれている。この建物が視界に入った時、ただの廃屋かと思っていた朔耶は面食らった。

「な、なんか、人の気配がしないんだけど……」
「皆おびえて奥に籠もっています。押し入ってきた人達に調度品やランプの類まで盗まれてしまって……、わたしや子供達は地下に隠れていたので無事でしたけど」
廃墟のような建物を哀しげに見つめながらそう説明するアマレスト。朔耶は意識の糸を伸ばして建物内を探り、奥の方に固まっている十数人の存在を確認した。
『これは……、建物の修繕費くらいなら支援しようと思ったけど、そんなレベルじゃないね』
ナカノモノ　ミナ　ウエテオルナ
自分の工房からどこまで支援できるかと、朔耶が考えていたその時。
「ん？　サクヤじゃねえか。何やってんだ、そんなところで」
よく知った声に振り返ると、カンテラをぶら下げたガリウスが、部下の面長騎士クランドルと連れ立って通りの向こうから歩いて来た。
「ガリウスこそ、何してんのよ？」
「見回りだ見回り。今くらいが一番治安が悪いんだ」
「最近、市場で盗みを働く者がこの辺りによく逃げ込むと聞いてな……」
クランドルの言葉に、アマレストの顔が一瞬青ざめる。幸い、彼等の目は朔耶に向いていたので、気付かれる事はなかった。朔耶はガリウス達に孤児院の窮状を話し、援助できないかと訊ねる。
「申請はしてるんだがな。ホラ、この前サクヤに持たせた書類の束があったろ？」
「ああ、城に直接届けたやつ？　あの中にあったんだ？」

結果はこの通り、やっぱりなとばかりにガリウスは肩を竦めて見せる。そうして先程から不安そうにこちらの様子を窺っているアマレストに声をかけた。
「つーわけだからよ、騎士団からの資金援助は無理なんだわ」
「あ、はい……そうでしたか……」
「まあ、俺んちは門閥なんで、俺が個人的にって手もあるんだが……」
「えっ！　ほ、本当ですか」
ぱっと顔を上げたアマレストは、縋るような瞳を向ける。
ガリウスの実家は有名な門閥貴族ジャバール家である。ガリウス個人が騎士として稼ぐ資産など微々たるモノだが、実家に頼めば相当な額が用意されるだろう。ガリウス自身は普段思うところあって、そういった送金を拒否しているのだが。
「それなりの代償は、払ってもらう事になるぜ……？」
そう言ってアマレストに近付いたガリウスは、彼女の顎をくいっと持ち上げる。思わず首を竦めたアマレストだったが、言葉の意味を理解すると、ゆっくり肩の力を抜き、涙を浮かべて頷いた。
子供達のためだと自分に言い聞かせ、震えながら目を閉じる。既にそういう方面での覚悟も決めていた身だ。門閥貴族からの援助が受けられるなら、孤児院も安泰。アマレストは二十三年間、貧しくとも清く守り抜いた貞操を捧げようとしていた。
「うわーー！　待て待て！　冗談だ冗談っ冗談に決まってるだろーーが！」
突然、恐怖の叫びをあげながら後退っていくガリウスに、アマレストは目を開きキョトンとする。

そして後方から放たれる威圧感と周囲を照らし出す青白い光に気付き、振り返った。
そこには、巨大な漆黒の翼に雷光を纏わせた悪魔が浮いていた。
カカカアァアアン！
「ぎゃーーーーっ」
「……アホだな」
漆黒の翼から放たれた雷に打たれる不良騎士の悲鳴と、その部下の呟きを聞きながら、アマレストは意識を手放しバッタリ倒れた。

「んん……」
孤児院の中庭にあるベンチに横たわっていたアマレストは、香ばしい匂いに空腹感を刺激されて目を覚ました。子供達のキャッキャッとはしゃぐ声。それを聞いて身体を起こし周囲を見渡す。
「あ！　お姉ちゃん先生が起きたよー！」
「姉ちゃん先生ーっ先生もシチュー食べなよ！」
「すっごく美味しいんだよ！　いっぱいあるんだ！」
皆口々にそう言いながら、肉や野菜の浮く白っぽいシチューを持ってきてくれた。アマレストはボンヤリしたまま、孤児院には無かったはずの容器を受け取り、中のシチューを一口食べる。
「美味しい……」
「そりゃ良かったわ」

呟きに応える声。ふと顔を上げると、黒髪の少女が微笑みながらそこに立っていた。その黒い瞳を見ていたら、次第に意識を失う直前の記憶が蘇り、アマレストは見る見るうちに青ざめていく。
「あ……、あわわっ悪魔が！　黒い悪魔が！」
「大丈夫、大丈夫だってば！　ごめんね、脅かして」
朔耶はアマレストを宥めて落ち着かせると、先程はガリウスの質の悪い冗談に対し自分がお仕置きをした――ヤキを入れたとも言う――だけで危険は無いと説明した。さっきのアレが朔耶だと聞いてもピンと来ないアマレストは、とりあえず曖昧な返事をする。そこへ――
「おーい、追加分の保存食買って来たぞー。ったく……騎士に買い物行かせるか？　フツー」
「魔力石と日用品はこれで十分だろう」
食料と魔力石と日用品を大量に抱えたガリウスとクランドルが買い出しから帰って来た。わーっと彼等に群がった子供達が、荷物を受け取っては院内に運び込んでいく。
「ごくろうさまー」
二人の騎士を労った朔耶は、改めてアマレストと向かい合った。
「今回はあたしの方から支援しとくけど、あなた達も自力でどうにか出来るよう考えてみてね？」
「あの……サクヤさん、貴女は一体……」
アマレストが問いかけようとした時、朔耶がふと立ち上がり、慌てて中庭中央へと駆けて行く。
「あーこらこらっそこに手をかけちゃダメ！　お鍋が引っ繰り返っちゃう！」
そう叫んで、楽しそうにはしゃぐ子供達を追い回す朔耶。その様子を見たアマレストは、感謝の

念を懐きながらも、この少女がどういう立場の人間なのか不思議に思っていた。
騎士達と親しく話し、それでいて彼等を従えるほどの権力を持つ少女。
さらには何か怖いモノも喚び出していた事を思い出し、プルプル首を振るアマレスト。そこへガリウスが首を回しながらやって来た。ベンチに腰掛けて一息吐いた彼は、彼女の疑問に答えてやる。
「サクヤは王室特別査察官様だよ」
「王室……！」
「ふぅ～まったく、子供の相手は疲れるわ……む？　ガリウス、また彼女にちょっかい出してないでしょうね」
追いかけっこから戻って来た朔耶は、アマレストと並んで座るガリウスをジロリと睨む。
「疲れててソレどころじゃねー」
ガリウスは買い出しのため、裏通りの外れにある孤児院と、街の中央通り市場との間を何度も往復させられてへとへとになっていた。ベンチから立ち上がったアマレストは、「計算通り！」とか言っている朔耶のもとに歩み寄ると、膝を突いて感謝の意を表す。
「わっちょっと、そんな事しなくていいから頭上げてよ」
「いえ、数々のご無礼をお赦し下さい。王室所縁の方からの孤児院への援助、感謝いたします」
「だーから、そんな畏まらなくてもいいんだってばっ。大体この支援はあたしの自費だから王室云々は関係ないし」
ゆっくり顔を上げるアマレストに、朔耶は一つだけ忠告しておく。

「アマレスト達が自力でやっていけるようあたしも協力するからさ、だからさっきみたいに簡単に諦めて身体を許すなんて事はしないで」
「サクヤ、さま……」
じわっと涙を浮かべたアマレストを、朔耶は「ね？」と言って優しく抱き締める。その途端、アマレストの感情があふれた。
今までずっと苦労の連続で、それでもじっと耐えてきた。そんな中こうして優しくしてくれたのは、亡き院長先生以外では初めてだった。数年ぶりに心からの安堵を得たアマレストは、朔耶の胸に顔を埋めて子供のように泣いていた。
そんなアマレストのくすんだ銀髪を優しく撫でてやる朔耶。ベンチに座って一部始終を見ていたガリウスは、おもむろに腕組みをすると難しい顔で唸る。
「何よ？」
「お前……同性嗜好って本当だったのか？」

この日、騎士団本部の食堂では、目を据わらせ自分が決して同性を好む者ではない旨を懇々と説き続ける朔耶と、もう勘弁してくれと泣きを入れているガリウスの姿が夜遅くまで見られたとか。
「聞きなさい、だからね？　あたしにそういうつもりが無くても誰かの行動が誤解を招いた結果、それを見ていた人が――」
「……頼むから、マジでもう寝かせてくれー」

第二章　釣り船観光計画と魔力石モーター開発

先日の孤児院での一件以来、朔耶はカースティアと王都の工房を行き来する日々を送っていた。
度々アマレストのもとを訪れては街の噂話に耳を傾けたり、彼女の相談事について話し合ったりして親睦を深め、釣り船の備品を作る合間に作ったランプなどを持参したりする。いつも降り立つ派遣騎士団本部に詰める騎士や職員達も、数日おきに現れる朔耶に慣れてきたようだ。
それどころか『ああ、今日はいらっしゃる日か』という具合に、朔耶のいる日は訓練や街の見回りに力を入れる『特別強化日』となっていた。強力な癒しの光で怪我も疲労も治してくれるので、少しばかり無理をしても大丈夫という訳である。朔耶が常に自然体で振る舞い、一般民のアマレストと親しく接している事も、騎士達から過剰な畏怖を拭い去る一因となった。
そうして朔耶がカースティア観光事業に着手してから約一ヶ月。三艘分の船外機や備品が整い、釣り船乗り場などの施設も完成。従業員の採用や料金設定、仕事内容の打ち合わせも終わったその日の昼頃、王都の自分の工房にやってきた朔耶にティルファから釣り船一号艇が完成したとの報が届いた。
「よしゃーー！　ティルファに飛ぶわよーー！」
朔耶はすぐさま一艘分の船外機や備品を工房の倉庫から引っ張り出すと、特別に用意してもらっ

た四頭立ての貨物用竜籠に積み込んでティルファに飛んだ。

「ドマックさーん！」

「来たか、早かったな……っておいおい！　ここに降りるのかっ」

夕方頃にはティルファの上空に到着。直接ドマックの造船所脇に竜籠を着陸させた朔耶は、作業員達と一緒に荷物を降ろしながら、船外機と備品の取り付けについて話し合った。

「全部取り付けて完成した状態にして、そのままこの竜籠で持っていこうと思ってるの」

「ふむ、それなら航行実験は今夜にでも行う事になるのう」

ドマックは船を竜籠に積み込むためのクレーンを手配するよう部下に言い付けると、早速船外機の取り付け作業に掛かる。朔耶も船に上がってランプや魔力石コンロなどの備品を設置していった。

船外機は手で直接動かすのではなく、船の中央部分にある一段高くなった操舵室から操作する事になる。操舵室と船外機を繋ぐ仕掛けの調整も必要だ。

「一応釣り道具も持ってきてるから、航行実験の時は使ってみてね」

「ふふん、新型機械船で夜釣りとは悪くない。なかなか面白そうじゃ」

そうして作業を進めていたところに、クレーンの手配に出かけていた作業員が声をかけてくる。

「サクヤさーん、表の竜達がなんか鳴いてますよー？」

「あ！　いっけないっ忘れてた！」

ひらりと船から飛び降りた朔耶は、着陸後放ったらかしにしていた竜達のところに走った。

「ごめんごめん！　厩舎に移すの忘れてたよ」

ぐでっと地面に伏せていた竜達から抗議の四重奏が響く。

「キューキュー」

「キョー……」

「ピー……」

「キュルー……」

お腹空いたーと鳴いている竜達を連れて、朔耶はティルファの厩舎に移動した。ティルファにも街灯が導入されているが、湖の畔にまでは設置されていない。それ故、厩舎のある湖周辺は夜になるとかなり暗い。その暗闇から四頭の竜を従えて現れた朔耶に、厩舎の世話係は飛び上がらんばかりに驚いたが、竜達がお腹を鳴らすのを聞いてすぐに餌の肉塊を用意してくれた。喉を鳴らして齧り付く竜達。

「明日はかなり長く飛んでもらう事になると思うから、今日はゆっくり休んでね？」

朔耶の言葉に、四重奏で返事する竜達であった。

「戻ったか、お前さんに客が来とるぞ」

「え？」

朔耶が造船所に戻ると、ちょうど建物内に引かれた湖水面に船を降ろすところだった。そんな中、作業員達と慎重にロープを引きながらドマックが顎髭で指した場所に、見覚えのある人物が立って

いる。長い銀髪を背中で束ねた、魔術士風の男性。朔耶がその姿に気付くと、目を細めて微笑を向けてきた。
中央研究塔所長、ブラハミルト・オードリン。ここティルファを治める最高責任者である。
「こんばんは、フレグンスの精霊女神殿」
「ブラハミルトさん……。こんばんは、どうしたんですか？」
また通り名が更新されたかと密かに嘆きつつも挨拶を返し、わざわざ訪ねてきた用向きを訊く。
「いやなに、私も貴女の船に興味があったのでね」
「そうなんですか？　じゃあこれから航行実験なので一緒に乗ります？」
「もちろんですよ」
朔耶は王都の革裁縫職人の工房で作ってもらったライフジャケットをブラハミルトに渡すと、それを身に着けるよう告げ、湖面に下ろされた釣り船一号艇に乗り込んだ。メンバーは朔耶とドマック、ブラハミルトの他、作業員二人とブラハミルトの警護で付いてきた衛士二人である。
船のランプを灯した朔耶は、操舵室に上がって船外機を起動する。建物から湖に出ると、どこで聞きつけたのか数十人の見物人が集まっていた。
衝撃のサクヤ式機械船推進器がお披露目され、朔耶の発注を受けたドマックが建造を始めた時から、この船には皆が注目していたのだ。機械船を前提としたフォルム、全長七メートル、幅三・五メートル程の船体がゆっくりと桟橋付近に近付いていく。
魔力石ランプを元に作った十二個ものカンテラやランタンが煌々と船の周辺を照らし出し、近くで見ようと集まった見物人達の姿を浮かび上がらせる。そんな彼等に向かって、朔耶は折り畳んだライフジャケットを一着投げ込んだ。
「うわっ！」
「な、なんだっ」
イキナリ何かモコモコした四角い塊を投げ付けられて、思わず飛び退く見物人達。一人逃げ遅れた若い発明研究家がそれを受け止めた。彼は『なんじゃこりゃ』と謎の物体を広げて観察する。
「そこのあなた！　それを身に着けて。こんな風に羽織って前を結ぶだけだから、簡単でしょ？」
朔耶は自分達が着用しているライフジャケットを指して使い方を教えた。若い発明研究家は、何だかよく分からないがサクヤ式の衣服らしい、という事でとりあえずそれを身に着ける。その間に朔耶は船を桟橋に寄せた。
「身に着けた？　じゃあ、船に乗って」
「えっ！」
驚愕した表情で固まる若い発明研究家。
今回の船は八人乗りなので一人分枠が余っていた。だからもう一人、抽選で決めたと説明して彼に乗船許可を出す朔耶。かなり不意打ちで強引な抽選だが、おかげで混乱が起きなかったとも言える。
言葉の意味を理解した彼は大喜びで、いそいそと釣り船一号艇に乗り込んだ。彼の近くで素早い身のこなしを見せた研究家達は、「何故あの時避けてしまったのだぁ！」と頭を抱えて悔しがっていた。

「それじゃあ適当に真ん中辺りまで進めたらゆっくり流すから、釣りの具合も確かめてみてね」
独特の駆動音を響かせ、釣り船一号艇は湖の中央付近に向けて航行する。そして適当な位置で船を止めると、想定している客数の五人でとりあえず釣り糸を垂れた。
航行から釣り具の管理、魔力石コンロの使用まで実際の営業内容に即した実験を一通り行い、問題無い事を確認する。もっとも、研究家やドマックは魔力石ランプやコンロに夢中で、メインの釣りはそっちのけだったが。
小一時間ほどで岸に戻ると、釣り船を竜籠に載せる作業に入る。なかなか大掛かりでドマック造船所の作業員だけでは手が足りなかったが、ブラハミルトがティルファの陸軍に当たる都軍兵を動かしてくれたので、積載作業は順調に進んだ。
「カースティアにも建築作業用のクレーンがあるはずですから、それを使うといいでしょう」
「うん、ありがとね、ブラハミルトさん」

作業を終えて一息ついた朔耶は、ブラハミルトから一緒に夕飯でもどうかと誘われて中央研究塔に赴いた。ドマック造船所の皆も招待され、一階中央のステージを会場に、ちょっとした立食パーティのようなものが行われる。
皆でワイワイと食事をとりながら、朔耶はブラハミルトと色々な話をした。グラントゥルモス帝国の事や、フレグンス王国の事。先日のサムズ侵攻を煽ったと思われる商人国家キトと、その使者ヨールテスの事。時折、ブラハミルトは朔耶の世界についてさりげなく聞いてくるが、朔耶が話さなければそれ以上訊ねようとしない。紳士に徹したその態度は好感の持てるもので、朔耶は彼を『信用しても良い相手』と認めつつあった。
「なるほど、帝国ではそんな動きがありましたか」
朔耶は、帝国内の政変の理由を『裏で帝国を牛耳っていた者が討たれたから』とし、自分がグラントゥルモスの先代皇帝エイディアスを討った事はぼかしながら、その裏の支配者が〝発掘品〟による不老不死の研究をしていた事なども話す。
古代魔法文明の遺物である〝発掘品〟の調査、研究は、かつてのティルファでも盛んに行われていた。古今東西、不老不死に関する研究に取り憑かれる者は絶えない。ティルファの研究者にも、帝国まで出向いて手を出していた者は少なからずいただろうと、ブラハミルトは表情を翳らせる。
キトに関しては、帝国政変以後も、またサムズ動乱前後も特に変化は見られなかった。だが――
「やはり、あそこであの男を逃がしたのは私の判断ミスだったのかもしれない」
朔耶から、ヨールテスが傭兵団陣地で戦いを煽っていた事を聞いたブラハミルトは、警戒は怠らない方が良いとの自分自身への戒めも籠めてそう語った。
『ヨールテスかぁ……今頃どこで何してるんだろうね』
タシカニ　アヤツカラハ　ヒトニアラザル　ケハイヲ　カンジタ
またどこかで『儲け話』でも企んでいるのかもしれないねーなどと、割と呑気な事を考える朔耶なのであった。

翌日。釣り船一号艇を積んだ竜籠に乗り込み、まだ夜も明けきらない内からティルファを飛び立った朔耶は、夕方頃にはカースティアに到着していた。これから湖に船を降ろす作業を始める。その作業をする労働者達が集まるまでの間に、一旦元の世界へと帰還する。

「ただいまーっ、ご飯ご飯ー！」

「お帰りを言う間もなくソレかよ」

庭に降り立つなりバタバタとキッチンに駆け込む。そんな朔耶に、最近都築家に入り浸り、孝文と魔力石の加工アイディアを練り合っている拓朗が呆れたように声をかけた。

「ほあ？　はふひゃんひへはお？」

「まあな。石の特性も分かったから、そろそろ俺も何か作るぜ」

「はひほほふひはん？」

「……とりあえず先にソレ食え」

冷蔵庫にあったソーセージを咥えながらもごもご喋る朔耶と会話を試みた拓朗だったが、さすがに翻訳不能だったので、とっとと食えとばかりにソーセージを指で押し込む。

「んぐっ！　けほっ……拓ちゃん酷い」

「あ、すまん」

涙目になって抗議されるも、もぐもぐ食べながらなのでちっとも罪悪感が湧かず、苦笑を返すのみの拓朗だった。

「銃みたいな飛び道具にしようかと思ったんだけど、タカ君が反対するんだよな」

「そりゃあね。そんな物持ち込む意味が無いし、争いの元になるだけだと思うよ？」

夕飯を食べながら拓朗の作ろうとしている物を聞いた朔耶はそう返す。銃のように強力で手軽な武器は、今のところあの世界には必要ない。

「そうかなぁ、なんか怪物退治とかそういうのは無いのか？」

「いるところにはいるみたいだけど、魔術と剣でなんとかなってるみたいだし」

向こうの世界では朔耶にも銃など必要ないし、誰もが使えるように量産した場合、必ず悪人の手に渡るだろう。もしそうなったら何が起きるか……という話である。事故だって起きるかもしれない。

「サクヤ式で治安悪化！　とか、あたし嫌だよ？」

「ああ、そうか……お前の名前が付くんだったよな」

「それもあるけど、街に住んでる一般の人達は荒事なんて望んでないの。平和に暮らしたい人達ばっかりなんだから」

「う……」

拓朗は自分の浅はかな提案を詫びる。異世界や精霊、剣と魔術などといった話を聞くと、ついその世界で強力な現代兵器を使って活躍する場面ばかり思い描いてしまう。だが、そこに住む人々の日常という、本来最も尊重しなくてはならない部分への配慮を欠いてしまっていた。

「まあ、夢見がちな男の子だもんね」

「ははは……」

朔耶のフォローなのか追い討ちなのかよく分からない慰めに曖昧な笑いを返した拓郎は、また何か別の物を考えると言って自宅へと帰っていった。
夕食を終えた朔耶は、釣り船観光事業の総仕上げをするために、今日は夜中まで向こうで作業をする事を家族に告げて庭に出た。しかしふと考え込み、兄重雄を呼ぶ。
「ん？　どうした」
「うん……、ちょっと手伝ってくれる？」

カースティアの湖近くに建てられた観光施設。釣り船乗り場には騎士団に雇われた労働者が集まり、竜籠から船を湖に降ろすための準備作業が進められていた。
既に辺りは暗くなっており、陸で篝火を焚いて明かりを確保しているが、真っ暗な湖畔での作業は困難を予想させた。篝火船も用意しようかと騎士達が話し合っているところに、空から黒い翼を広げて舞い降りてくる黒髪の少女。
どよめきと混乱。だが本部の屋上で何度も目撃した騎士達はさすがに慣れたモノで、うろたえる労働者達を落ち着かせ、作業の指示を仰ぐべく朔耶のもとに集まってきた。
「はーいっ、下がって下がってー、みんな下がってー」
朔耶は皆を下がらせると、地面に小枝で線を引き始める。なんだろうと覗き込む人々を余所に長方形を描き上げた朔耶は、その四隅に庭から持ってきた石を置いた。魔力が籠められたそれらの石は、ほのかに発光している。

「みんな絶対この中に入っちゃダメよ？　命に関わるからね」
そう注意を呼びかけた朔耶が忽然と姿を消す。そのまましばらく、ボンヤリとした石の光が薄れていく様子を眺めていた人々は、突如四角の中に現れた物体に仰天した。
四つの車輪をつけたソレは、傭兵団が使う装甲馬車のようにも見えた。御者台は無く、全面が艶のある金属で覆われている。四方には大きな窓があり、前に突き出た顔のような部分はまるで甲冑兜を纏った魔獣のようだ。
その金属車の扉が開いて朔耶が降りて来る。すると二度目の混乱はすぐに収束した。騎士達は金属車の中のもう一人、朔耶と同じ黒髪をした男性の存在を気にしながら、朔耶の周りに集まる。
「サクヤ様、これは一体……？」
「ああ、危なくないから大丈夫だよ。ちょっと作業の手伝いに呼んだの」
朔耶が振り返って男性、すなわち重雄に合図を送ると、金属車――ランドクルーザーのエンジンが掛かった。
聞いた事もないような嘶きと咆哮、そして生き物には見えないが生き物としか思えないような低い唸り声と脈動。その様を見た騎士達は『やはり魔獣の類か』と、思わず後退ってしまう。さらにその魔獣の目が強烈な光を放つ。労働者達は一斉に逃げ出しそうになったが、至近距離にいる騎士達がその場から動かず、なおかつ光を浴びても無事であるのを見て、どうにか踏み止まっている。
「はいはい、噛み付きゃしないから大丈夫よ。じゃあみんな、船を降ろす作業を始めるわよー！」
浮き足立っている騎士や労働者達に声を張り上げて、朔耶は作業開始を告げた。

こちらに転移する前、朔耶は以前ドマックの工房で船外機の取り付け作業を行った際に夜の暗さで結構苦労した事を思い出し、何か強力な照明はないものかと考えた。工事現場で使うような、広範囲を明るく照らし出せる照明は、さすがに家の倉庫にも置いてない。なので兄の車のヘッドライトを使う事にしたのだ。問題はあまりカースティアから離れた場所に転移してしまうと、作業に間に合わなくなってしまう事。そして神社の精霊と相談した結果、正確な座標に転移する方法として、特定の物質に強力な魔力を籠め、そこを目印に跳べば行けそうだという結論に至ったのだ。

地面は湖に向かって少し傾斜しているため、ヘッドライトの光はいい感じに作業現場を照らし出している。まるで昼間のような明るさに加え、労働者達がこの珍しい状況に興奮していた事もあってか、作業は順調に進んでいた。

そこへ、見回りに出ていたガリウスとフランが、街の人からの通報を受けて様子を見にやって来た。

「おー？　なんだこりゃ、魔獣の類かあ？」

「凄い光だなぁ、これもサクヤちゃんの力なのかな？」

二人は物珍しそうにランドクルーザーを観察している。朔耶が関係していると知った時点で、何も心配はしていなかったようだ。

「あ、いいところに！」

「俺は見回り中。用事ならフランが引き受けるぜ」

朔耶の台詞を聞いてすかさず逃げようとするガリウス。どのみち観光事業の人事について詳しく知っている者にしか出来ない用事なので、朔耶はそのままフランに頼んだ。

「フラン君、観光事業で契約してる船長さん達と宿の主人さん達を呼んで来てくれる？」

朔耶は今日中に諸々の調整を済ませて明日からでも営業を開始したいと思っていた。そのための構想も、十四時間に及ぶティルファからの移動中に考えてある。〝思い立ったら即行動〟の家訓に従い、朔耶は練り上げた構想を現実化していく。

やがて、強力なヘッドライトに照らされた湖の畔で歓声があがった。船が無事、湖に降ろされたのだ。ふわりと宙を舞って船に乗り込んだ朔耶は、船のランプを全て灯すと、操舵室に上って船外機を起動させた。

独特の駆動音を響かせながら帆もオールも無しに動き出す船に、またもどよめきと歓声があがる。重雄も愛車のサンルーフから顔を出して、釣り船乗り場の桟橋に向かうサクヤ式機械船、釣り船一号艇の雄姿を感慨深く眺めていた。

少しして、契約している船長に料理人と補佐、事業を提携する一般宿と貴族用宿の主がフランに連れられてやって来る。そして釣り船に乗り込み、朔耶の説明を受けながらライフジャケットを身に着けた。

船長には船外機の機能と操作方法をレクチャーしつつ、補佐役にも航行中に客が釣りを楽しんでいる間や接岸時の役割を伝える。料理人には魔力石コンロの使い方を教え、足りない調味料などがあれば申請するよう言い添えた。

「あと二人乗れるけど、フラン君とガリウスも乗ってみる？　あ、ガリウスは見回り中だっけ」

「乗る乗る！」
「見回りはさっき終わったぜ」
フランは嬉々として乗り込み、ガリウスは予想通りしれっとフランの後に続いた。ライフジャケットは騎士の甲冑の上からでも何とか着る事が出来たが、騎士達は非常に斬新で奇抜な姿となった。ぶっちゃけ、凄く格好悪い。
「これはひどい」
鎧の上から着てもそこそこ見られるデザインを考えようと本気で考える朔耶。実際、フル装備の騎士を今の仕様で浮かせられるのかという点にも不安が残る。
朔耶はとりあえず湖畔にいる兄に手を振り、ハイビームによる返答を確認してから船長に船を出すよう指示を出した。
一帯を照らすランドクルーザーの光が一段と輝きを増して、釣り船一号艇の姿を浮かび上がらせる。桟橋近くでは大勢の労働者や騎士達、それに野次馬達がこのイベントを見物していた。
「素晴らしい船だ！」
船長はすぐに船外機の動かし方を覚えてその性能を絶賛。このサクヤ式機械船で仕事が出来る事を喜び、釣り船観光事業の成功に向けて尽力する事を誓った。
宿の主人二人は、料理人と一緒になって魔力石コンロを弄っており、つまみで火加減を調節しては唸るという事を繰り返していた。補佐役は釣り客の世話の予行演習として、ガリウスとフランに釣り具を用意し、餌をつけ、網を持って待機する。船周辺や船内の様子に気を配る事も忘れない。

やがて釣り具を渡されたガリウスが大物を釣り上げ、早速料理人がコンロで焼いているところに、フランもそこそこの獲物を釣り上げた。二台のコンロを使って魚を焼けば、煙は船室に充満する事無く順調に排出され、改めて問題なしと判断できた。
「これなら、いけそうだね」
船を乗り場に戻してしっかり係留した後、朔耶は空になった竜籠が放置されている作業開始地点に戻る。そして見物人達を解散させて、労働者に報酬を支払うよう騎士達に指示を出した。竜籠は明日回収する事にする。
ぞろぞろ移動を始める労働者達と見物人達の視線の先では、未だ強力な光で湖面を照らす魔獣のような金属車に、召喚主の少女が乗り込むところだった。
「上手くいったみたいだな」
「うん！　あ……お兄ちゃんも船、乗りたかった？」
釣り船に船外機を使おうと言った発案者は重雄である。その船関連でこちらの世界に連れて来ておいて、照明係をさせたダケというのは何やら申し訳ない。そう気に掛ける朔耶に、兄はまた次の機会で良いと笑った。
回収した庭の石を座席の足元に置いてシートにもたれた朔耶は、一息吐きながら神社の精霊に帰還を呼びかける。
『帰ろ』
ウム

騎士や労働者達が見守る中、朔耶と謎の人物を乗せた金属車が忽然と消え失せたが、今度は混乱やザワメキが起きる事はなかった。
「サクヤ様だからなぁ」
一人の騎士の呟きが、全員の心を代弁した。

翌日。カースティア観光事業の釣り船観光計画は最終段階に入った。祝日を利用し、今日も朝からオルドリア大陸にやって来た朔耶は、派遣騎士団本部の食堂で釣り船観光のビラを作っていた。
朔耶はこちらの文字を書けないので、考えてきた宣伝文を読み上げ、それをフランがビラの原版となる紙に綴っていく。料金や注意事項などは乗り場に掲げる大きな看板に記し、このビラは街中に撒く予定だ。
「うん、いい感じ。後はこれを増やして街中で配ればいい宣伝になるね」
「これ、結構字数が多いから複製するの大変だよ？」
「ちょっと反則するから大丈夫。フラン君は釣り船乗り場に行って営業開始の準備をしておいて。そこにある看板も忘れずにね？」
そう指示を出した朔耶は、出来上がった原版を持って一旦元の世界へ帰還する。慣れたとはいえ、たった今までテーブル一つ挟んで会話していた相手がいきなり消え失せるのは心臓に悪い。
「せめて消える前に何か予兆があればなぁ」
若干心拍数を高くしながら、フランは指示された看板を抱えて釣り船乗り場へと向かった。途中、

ふと先程の会話を振り返って呟く。
「反則ってなんだろう……？」
自宅の庭に帰還した朔耶は、待っていた兄の車で父親の工場に向かうと、事務所に置いてあるコピー機を使ってビラを複製した。二百枚程度だが、カースティアの街で撒くには十分な量だ。作業を終え、折り返し自宅の庭に戻る。
「俺は今日はアッシー君か」
「うぁ……古」
妹の〝会心の一撃〟に沈む兄を放置して、朔耶はとっとと オルドリア大陸に転移した。

壁の穴や扉の修繕が済んですっかり見違えたカースティアの孤児院。その中庭に舞い降りた朔耶は、子供達に纏わり付かれながら、院内で内職をしていたアマレストにビラ配りを依頼した。
騎士達よりアマレストと子供達の方が威圧感もなくスムーズに配布できると考えたからだ。その上、報酬は孤児院の収入にもなる。喜んで引き受けるアマレストにビラ百五十枚を渡した朔耶は、残りのビラを持って騎士団本部へと飛んだ。
騎士団本部内の受付前の壁にもビラを貼り出し、さらに三十枚ほど受付カウンター脇に置いて行く。そして事業提携している宿を訪れ、ここでも目立つところに貼ってもらった。宿の従業員もある程度は事業内容を把握していたので、客に訊ねられた場合は勧めてくれるよう頼んでおく。
そしてこの日の昼、ついに釣り船観光の営業が開始された。

釣り好きな人の興味を引いたのはもちろん、機械船の珍しさもあって乗り場には十数人の見物客が集まっていたが、最初の客はこの日のためにわざわざティルファから足を運んでいた研究者だった。彼等は釣りよりも機械船に乗る事を目的にしていたので、魚は一匹も釣れなかったようだ。

営業は夕方までに二回、夜も一回行われる。二回目は釣り好きの老人と、集まっていた見物客等が乗船したが、特に問題も無く、釣りや簡単な調理を楽しんだ客達は満足気な表情で戻って来た。これから夜の部まで、船長以下乗組員は休憩に入る。

「どう、夜もやれそう？」

「もちろんですよ。まったく問題ありませんな」

朔耶に訊ねられた船長達は、船外機に使われた魔力石の補給交換作業を行いながら、今までやってきた漁の仕事に比べればトンでもなく楽、かつ誇りを持てる仕事だと笑って答えた。

夜の部は宿で釣り船観光について知った観光客が、珍しいサクヤ式機械船を記念に体験していこうという事で申し込みを入れてきた。本来彼等は温泉街バーリッカムに行く途中、ちょっとカースティアを経由するだけだった客だ。こういった旅行客からも口コミ効果が狙える。

「うん、これなら大丈夫だよね」

順調に動き始めた釣り船観光事業。朔耶は乗り場の従業員達に後を任せて、元の世界に帰還したのだった。

「ただいまー」

立ち読みサンプルはここまで

「お帰り。朔姉、ちょっとこっち来てくれ」

帰宅するなり孝文からお呼びが掛かったので居間に行ってみる。すると新聞紙が敷き詰められた畳の上で、後輪辺りに色々と改造を施されたキックボードが鎮座していた。

「これって？」

「モーターの小型化が出来たんで、車輪一体型の魔力石モーター搭載キックボード試作、の失敗」

「すごーって、失敗？」

「乗ってみ」

弟に促され、廊下にキックボードを持ち出して乗ってみる。ハンドル部分にある自転車の変速レバーを改造したモノが起動スイッチのようだ。とりあえずスイッチオン。

コロ……コロ……コロ……

「遅っ！」

「パワー不足でそんな感じなんだよ。ちなみに俺とか重兄が乗るとピクリともしない」

「ダメじゃん」

全面的に見直す必要があると言って、弟は疲れたように居間に転がった。今日は一日コレの製作をやっていたらしい。朔耶が帰ってくる前に失敗は確定していたのだが、せっかくだから如何に失敗だったか実体験させてあげようと、処分せずに待っていたそうだ。

「なんでまたわざわざそんな力抜ける事するかな……」

燃え尽きて伸びている弟と、進んでいるのが気のせいかと思う程に遅い〝車輪一体型魔力石モー